

博士後期課程Ⅲ期

令和六年度 武蔵野大学大学院

文学研究科 日本文学専攻 博士後期課程

入学試験 解答用紙（三月十日）「専門科目」

※筆記用具は黒のボールペンを使用してください。

設問 一次の①～⑥の事項のうち3つを選んで、それぞれについて説明しなさい。

① 雅俗

② 中国唐代の散楽と日本の平安時代以降の猿楽

③ 世阿弥の能楽論における幽玄

④ 江戸時代の謡本出版に際しての詞章改訂

⑤ 正岡子規『歌よみに与ふる書』

⑥ 三島由紀夫『近代能楽集』

受験番号

--	--	--	--

--	--	--	--

氏名

--

博士後期課程Ⅲ期

令和六年度 武蔵野大学大学院

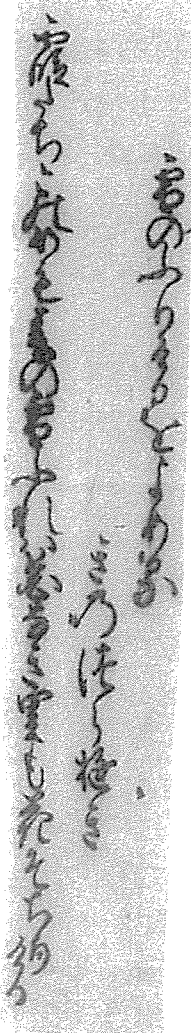
文学研究科 日本文学専攻 博士後期課程

入学試験 解答用紙 (三月十日) 「専門科目」

※筆記用具は黒のボールペンを使用してください。

受験番号	
<input type="text"/>	<input type="text"/>
氏名	
<input type="text"/>	

設問二 次の影印にある和歌と詞書き、歌人名を楷書で翻刻した上で、和歌を解釈しなさい。



【翻刻】

【解釈】

設問三 次の文章を読み、現行の謡本の詞章と、室町時代の謡本の写本や江戸時代初期の板本の詞章とを比較検討することの意義について、自分の考えを述べなさい。

『申楽談儀』に記された近江猿楽の犬王所演の《葵上》は、現行のそれとはかなり様子を異にする演出法だったことが知られている。

まず、前シテが車の作り物に乗って登場するが、それは六条の御息所という身分だけのことではなく、彼女の怨念の根元に、賀茂の御禊の折の、葵上一行との車争い(『源氏物語』葵巻)があつたことがふまえられているからで、シテ登場の謡も、車へのイメージを強調した詞章となつている。前シテはまた、ツレとして車副えの女(青女房)を伴つており、「青女房と思しき人の 牛もなき車の轆はなに取りつき さめざめと泣き給ふ」姿を見せている。従つてまた、枕の段直前のウワナリ打ちにかかる掛合は、シテとツレ(青女房)との掛合であつた筈である。然るにその後、車の作り物もツレ(青女房)の登場も省略されてしまつたが、詞章は元のまま残しているために、この掛合も、いま舞台で見られるように、シテとツレ(照日の巫女)が言うようになつてしまつてしまつているのである。それは能の演出が、多人数が登場する古態から、洗練化を辿る過程での処置であり、演出的には必ずしも改悪とのみは言えぬ一方で、矛盾や不合理な個所が残つたままになつてしまつてしまつたことも否定できない。

昨年十月に、法政大学能楽研究所の主催で、古演出による《葵上》の試演が行なわれたが、それは右のような古型を具体的に観賞出来る絶好の機会であつた。関西でもそのような上演を是非とも期待したいが、古《葵上》の復元的形態ということでは、右以外にも、まだいくつかの推測が可能であろう。たとえば、ツレとして登場する梓巫女の場合、その装束は白木衣に木綿襷をかけ、水晶の数珠を持つのであるが、弓の絃を鳴らし口寄せをするのが梓巫女なのだから、《歌占》のシテが弓を持つのと同様、元来は弓を持って登場していたかも知れない。当時の梓巫女の画証は、最近森暢氏によって紹介された「職人歌合絵十二番本」(『古美術』74)に見られることを阿

(つづく)

博士後期課程Ⅲ期

令和六年度 武蔵野大学大学院

文学研究科 日本文学専攻 博士後期課程

入学試験 解答用紙 (三月十日) 「専門科目」

※筆記用具は黒のボールペンを使用してください。

受験番号
<input type="text"/>
氏名
<input type="text"/>

部泰郎君から教えられた。鎌倉末期から室町初期にかけてのものと言われる伊達家旧蔵本の画は、朱塗の高坏の上に、左手で弦を上にして弓を横たえ、右手に楯を持つ「御子」の図で、鼓を脇に置いている。「東北院歌合」の「巫女」図が鼓を構え持つのと異なり、梓巫女のイメージを具体的に伝えるものとして貴重である。なお同時に紹介されている大東急本や福井家旧蔵本もほぼ同様ながら、こちらは守袋をかけている。弓は桶の上に乗せて、共鳴のための工夫と察せられる。ともあれ、こんなかたちを《葵上》の古演出試演に応用して見てはどうだろう。

さて《葵上》では、物の怪の正体を見極めることを梓巫女に命ずる。それを命じたのはワキツレとしての「朱雀院に仕へ奉る臣下」であるが、なぜ朱雀院の臣下であるのか、《葵上》一曲中からはその必然性が明らかでない。ちなみに、「源氏物語」では朱雀院は光源氏の兄にあたる帝、葵上は光源氏の正妻である。しかも葵上は「左大臣の御息女」なのだから、むしろ左大臣がワキツレである方が自然なのである。原型を臆測するに、朱雀院が何らかの形で関与しているとも考え難いから、元来は左大臣が梓巫女を召喚せしめた形であったが、「当今に仕へ奉る臣下」などという一曲冒頭の名ノリに類型化せしめた処置のように思われるのである。後段でも、ワキツレは横川の小型（ワキ）を招くが、小型は「この間は別行の子細あつて いづ方へも罷り出でず候へども 大臣よりのおん使と候ふほどに……」と、それを大臣よりの使者と云うところが思い合わされる。

ところで、梓巫女を召喚するための使者はアイがつとめる。現行ははじめから舞台に登場していて、ワキツレが「やがて梓におん掛け候へ」との命令に応じて、すぐに「天清浄……」と謡い出すのであるが、室町期の古写謄本によれば、ワキツレがまずアイを呼んで梓巫女を召すように命じ、アイの呼び出しで巫女が登場するかたちであり、それは江戸初期版本でも同様であるから、現行のかたちはそれ以後の改変ということになる。

このアイは、葵上の容態悪化で、横川の小型を招聘するために再び使者となる。アイは使者の大役を果し、承諾の旨をワキツレに復命すると舞台から退くのが現行の私たちで、室町末期にはすでに同様であつたらしい。しかし元来は、もう少しその後の舞台展開に関与したのではなからうか。たとえば「病人はいづくにござ候ふぞ」というワキに、「あれなる大床にござ候」と答えるのはワキツレであるが、これなどはむしろアイの詞であるのがふさわしい。ワキツレは「只今のおん出で御大儀にて候」と挨拶するだけではないのである。

というのは、案内役としてのアイの職能ということながら、小型の祈禱の座が「大床」であつた筈で、それを葵上の病床としての「大床」へ案内するかのようには言うについては、古来誤解があるらしい。そもそも大床とは、寝殿造りの母屋に隣接した広廂を意味するが、それゆえ葵上の病臥する場所ではあり得ない。葵上は母屋になければならず、従つて、小型を大床に導く役もアイであるのがふさわしいと思われるのである。それについては横川の小型のモデルとして相応和尚が考えられるべきことも関連する。すでに新潮日本古典集成『謡曲集』上の解題に指摘した通り、『拾遺往生伝』によれば、右大臣良相の娘西三条女御の重病に祈禱を懇請された籠山中の相応和尚は、遂に下山し、僧綱並み居る中で、廂辺に座して神呪を以て調伏し、快癒せしめたという。威儀を正した貴僧高僧の中で、籠山中を駆けつけた験徳の和尚の導かれたのが大床であつたのである。《葵上》が「源氏物語」に題材をとりつつも、物語には見えぬ横川の小型の調伏譚には、相応和尚のこのような事蹟がとり合わされていると考えられるが、さればこそ葵上が大床にあるかの如く云うのは、《葵上》が改変を重ねていく過程での誤解によるものと思量されるのである。

〔かんづ〕二六三号、昭和六〇年一月

*設問三の解答は、次の四枚目に記入してください。

博士後期課程Ⅲ期

令和六年度 武蔵野大学大学院

文学研究科 日本文学専攻 博士後期課程

入学試験 解答用紙 (三月十日) 「専門科目」

受験番号

氏名

--

※筆記用具は黒のボールペンを使用してください。

【解答】